

第 1 回検討委員会における検討項目について

第1章 環境学習施設の整備方針

1-1 環境学習の必要性

現代社会において、私たちは、大量生産・大量消費・大量廃棄型の活動により豊かで便利な生活を享受してきたが、その一方で、廃棄物の諸問題、地球温暖化や海洋プラスチック問題、生物多様性の喪失などの深刻な環境問題を引き起こし、世界的な喫緊の課題となっている。

このような課題を背景に、持続可能な開発目標（SDGs）や地球温暖化対策の新たな枠組みであるパリ協定が採択されるなど、国内はもとより、国際的にも持続可能な社会の構築に向けた機運が高まっている。

持続可能な社会に向けては、私たち一人ひとりが環境問題に関心を持ち、日々の生活を見直していく必要があるが、そのためには、様々な学習機会を通じて、私たちの生活や行動が環境に大きな影響を及ぼしていることを理解し、自ら考え行動していく能力を身に付けていくための環境学習が重要である。

本県においても、環境基本計画を策定し、低炭素社会の実現、循環型社会の構築、自然と共生する社会の創出等を基本目標に定め、様々な施策を推進している。

また、持続可能な循環型社会の形成を目指して、第5次茨城県廃棄物処理計画を策定するなど、県民等の問題意識の向上や3R行動の促進を図り、子どもから大人まで県民一人ひとりに廃棄物や環境に対する理解を深めていただくため、環境学習をはじめとした普及啓発活動に努めている。

平成17年に供用開始した現処分場であるエコフロンティアかさまでも、ごみと自然環境の関わり方などを展示物に触れて体験しながら自発的に発見・学習できる環境学習施設を整備している。

1-2 整備の背景

(1) 新産業廃棄物最終処分場

県は、公共関与の産業廃棄物最終処分場エコフロンティアかさまの後継施設として、新たな産業廃棄物最終処分場（以下、「新処分場」という。）を整備することとし、令和2年5月に整備候補地として日立市諏訪町を決定、令和3年8月の日立市からの受諾表明後、翌9月から学識経験者や日立市関係者等で構成する新産業廃棄物最終処分場基本計画策定委員会で審議を進め、市民報告会を経て、令和4年4月に新産業廃棄物最終処分場基本計画（以下、「新処分場基本計画」という。）を策定した。

(2) 併設施設としての環境学習施設

新処分場基本計画においては、県民の資源循環や環境に関する意識向上を図るため、環境学習施設（以下、「本施設」という。）を併設することとし、その整備の方向性を定めていることから、本施設の具体的な整備内容を定めた新処分場併設環境学習施設基本計画（以下、「本計画」という。）を作成する。

<参考>新処分場基本計画における環境学習施設の整備の方向性

環境学習施設整備イメージ

①学ぶ

最終処分場の機能や役割、3Rをはじめ、地球規模の環境問題や脱炭素社会に向けた先端技術等に関する紹介や日立市の自然や環境政策の取組、地域資源など市民に身近な内容をテーマとした展示により、環境問題を自分事として捉え、環境への総合的な理解を深める。

また、最終処分場をはじめとした各施設を実際に見学することで、処分場設置の意義や安全性への理解を深める。

②体験する

地域資源を活用した体験学習やリサイクル体験メニューにより、環境と地域への興味・理解を深める。

③つなぐ・活動する

環境団体やボランティア等が活動できる拠点を創出し、地域の交流や環境に関する情報発信を促進する。

1-3 整備地の基本事項

(1) 整備地の概要

新処分場は、日立市諏訪町地内の「日立セメント太平田鉱山跡地」を活用して整備される。整備地は県道37号日立常陸太田線に接する。諏訪町は日立市の中央部に位置し、当整備地を含む多賀山地は地下資源に恵まれており、日立セメント株式会社がセメントの原料である石灰石を長年採掘していた鉱山である。

(2) 整備地周辺における地域資源

整備地と周辺地域資源の位置関係を図1.1に示す。また、周辺地域資源の概要を表1.1に示す。



地図出典：国土地理院地図（電子国土 web）

図1.1 整備地と周辺地域資源の位置関係

① 鮎川	高鈴山を水源とした河口まで約 5 km の川。アユ、ヤマメ、ハゼ等が生息しサケの遡上も見ることができる。この鮎川沿いに諏訪梅林があり、水遊びスポットになっている。	
② 諏訪の水穴 (整備地から約 500m)	緑豊かな自然に囲まれた清水が湧き出る小規模な鍾乳洞であり、内部では鍾乳石や石筍なども確認できる。	
③ 諏訪梅林 (整備地から約 1.5km)	水戸藩第九代藩主徳川斉昭(烈公)が、梅の木を数百本株植栽した歴史がある。四季を通じて数多くの市民が訪れる憩いの場となっている。	
④ かみすわ山荘 (整備地から約 2km)	鮎川の上流に位置し、上諏訪小学校跡地にある。宿泊施設の他、多目的ホール、野外炊飯施設を備える。	
⑤ 日立シビックセンター (科学館「サクリエ」) (整備地から約 5.3km)	市立記念図書館・音楽ホール・科学館・天球劇場(プラネタリウム)などを備えた複合施設。科学館「サクリエ」は見るだけではなく、遊んで学べる体験型の展示物が中心となっている。	
⑥ 日立市郷土博物館 (整備地から約 5.6km)	日立市の歴史と産業の移り変わり、人々の暮らしや祭りについて学ぶことができる。郷土にかかわる考古・歴史・産業・民族資料、美術資料を収集し保存、研究、展示を行う。	
⑦ 日鉱記念館 (整備地から約 5.7km)	日立鉱山を開業してから JX 金属グループに至るまでの活動を紹介する施設。採掘(鉱石、模擬坑道)、製錬(大煙突)、リサイクルなど事業ごとに展示を行っている。	
⑧ 日立オリジンパーク (小平記念館) (整備地から約 7.5km)	日立製作所の企業理念とともに創業製品から始まり 1 世紀を超えるこれまでの事業と社会貢献のあゆみを紹介する施設	

画像出典：日立市の観光案内 (<https://www.city.hitachi.lg.jp/kankou/index.html>)

日立市観光物産協会 (<http://www.kankou-hitachi.jp/>) ひたち風 (<https://www.city.hitachi.lg.jp/citypromotion/>)

表 1.1 周辺地域資源の概要

1-4 整備の方向性

1-4-1 本施設の目標

本施設は、持続可能な社会の実現に向け、資源循環に関する学習や日立市の豊かな自然と周辺環境を活かした学習を通じて、環境に関する総合的な理解を促進することはもとより、本施設を拠点とした地域間交流を図り、他の施設とも連携し、県内全域に波及できるような広がりをもった環境学習を提供できる場を目指す。

また、日立市と連携し、環境都市宣言をしている日立市のまちづくりに貢献し、県民全体の環境問題への意識醸成につながる施設を目指す。

このことから、本施設においては、次の3つを施設の目標として整備を進めていく。

1 学び、行動する次世代を育成

楽しみながら学習し、体験できる機会をつくり、資源循環や自然環境など環境に関する総合的な理解を深め、行動することができる次世代を育成

2 地域間交流の促進

地域や環境団体、企業などと連携した学習を推進し、多様な人と人との交流や活動を促進

3 県民全体の意識を醸成

県内の他施設などと連携し、県内全域に波及できるような学習や活動を通じた県民への資源循環や環境問題への意識を醸成



持続可能な社会

1-4-2 環境学習

持続可能な社会の実現に向けた効果的な環境学習を行うためには、近年の多様な環境問題について、その原因と解決に向けた取り組みを総合的に理解できる学習内容とする必要がある。

(1) 環境学習のテーマ

本施設においては、廃棄物の適正処理の先導的役割を果たす新処分場に併設するという特性を活かし、廃棄物を主なテーマとした学習から自然環境の保全、地球規模の環境問題まで発展する環境学習を展開することとし、次の3つをテーマとして進めていく。

○廃棄物と資源循環の推進

持続可能な社会を目指すうえでは、限りある資源を効率的に利用し、リサイクルなどで循環させながら、将来にわたって持続して使い続けていく循環型社会の形成が欠かせない。

私たちは、毎日の生活からごみを排出しており、今日の廃棄物問題の原因者の一主体となっているからこそ、私たちが日々の行動を見直すことで3Rを促進するだけでなく、企業の意識改革やリサイクル産業の育成にもつながり、廃棄物に起因する身近な環境問題や地球規模の問題を解決する循環型社会の構築へと変革される。

よって、「廃棄物と資源循環の推進」を本施設における環境学習のテーマの1つとする。

学習ワード例 _____

3R 最終処分場 食品ロス 海洋プラスチック

○自然環境の保全と共生

私たちの生活は、あらゆる面で豊かな自然のめぐみによって支えられて成り立っているが、私たちの生産活動、消費活動等によって様々な環境問題を引き起こし、自然環境の破壊や生態系に悪影響を及ぼしている。

自然環境を保全、再生し、持続可能な社会を実現するためには、身近な自然の大切さや現状を学び、私たちに何ができるのかを自らが考え行動する必要がある。

よって、「自然環境の保全と共生」を本施設における環境学習のテーマの1つとする。

学習ワード例 _____

日立市の豊かな自然 生物多様性

○地球温暖化への対応

私たちの生活が豊かになり、産業活動が活発になるにつれて、二酸化炭素等の温室効果ガスが大量に大気中に放出され、地球全体の平均気温を上昇させることで地球規模の気候変動等が発生し、私たちの生活や自然環境へ悪影響を生じさせている。

このような状況から、世界的にも政府や企業等による脱炭素社会を目指した様々な取り組みが加速しているが、私たち一人ひとりが問題意識を持ち、出来る限り地球温暖化対策を行うことが重要である。

よって、「地球温暖化への対応」を本施設における環境学習のテーマの1つとする。

学習ワード例

気候変動 海面上昇 脱炭素 再生可能エネルギー

上記の3つのテーマで環境学習を進めていくうえでは、新処分場基本計画において示した「学ぶ」、「体験する」、「つなぐ・活動する」のコンセプトを基に、3つのテーマが相互に関連するような環境学習により、環境に関する総合的な理解と意識醸成を図る。

また、地域や環境団体等の活動と連携した学習により、広がりのある環境学習を推進していく。

学習テーマの展開イメージを図1. 2に示す。

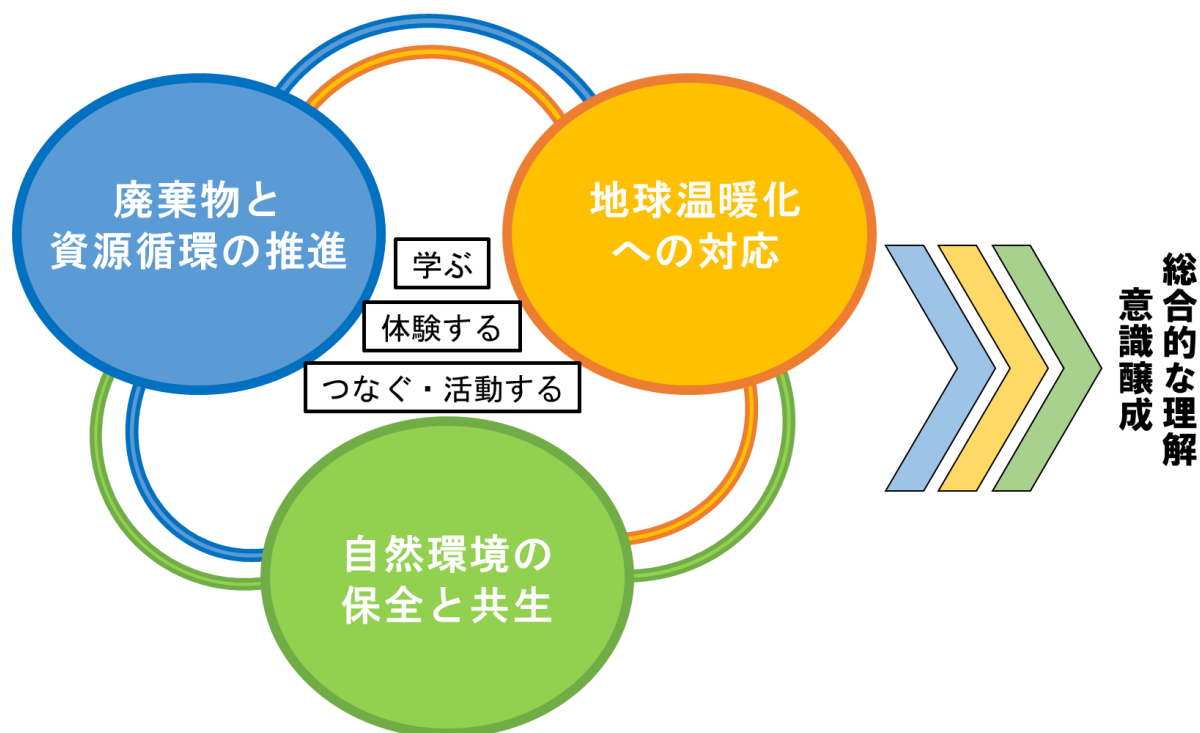


図1. 2 学習テーマの展開イメージ

(2) 学習対象

環境問題の解決に向けては、社会全体で取り組んでいく必要があるが、特に、次世代を担う子どもたちは、中長期的な環境問題への取り組みのメインプレーヤーとなる存在であり、早い段階から環境について学び、豊かな感受性や見識を持つことが重要である。

このことから、本施設においては、環境学習には基礎的な環境に関する知識が必要であることや、エコフロンティアかさまの環境学習の実績などを踏まえ、主たる学習対象は小学校高学年とし、子どもたちに対する環境学習に重点を置きつつ、子どもたちの見本となる保護者や社会活動の中核となる年齢層の利用にも広く対応できるよう考慮する。

1-4-3 企業等との連携

新処分場に併設する本施設の特徴を活かし、環境学習だけでなく、企業等によるリサイクルや廃棄物に関連する研究事業等との連携を図り、循環型社会の形成に資する取組を推進していく。